

「のしろ日本語学習会」の活動

■これまでしてきたこと、これからすること

野山 広 皆さんこんにちは。このフォーラムに足を運んでいただきありがとうございます。

まず、本フォーラムの趣旨について説明をさせていただきます。この野山班の研究テーマは、先ほど高橋センター長からご紹介がありましたように、地域日本語教育プログラムの在り方を検討するということです。問題意識として、最近の日本における外国人登録者の増加を踏まえて、いろいろな地域で共生のまちづくりというのを始めているわけですが、いろいろな課題、困難、それから喜びも当然あるし、うれしさも、悲しさも、いろいろなものがそこに出てくる中で、またそれをきっかけに新たないろいろなことが動いています。特に日本語に関する学習支援、教育支援は非常に大きな問題としてクローズアップされてきています。この問題を、日本語教育プログラムということで考えて、地域事例の分析や、協働実践を通して接近することで、何らかの基礎資料を提供しようというのが、この班の目的、問題意識です。

研究活動としては、2007年度は、今日のテーマになる秋田県の能代市、それから愛媛県の松山市、石川県の金沢市における日本語教室の実態を把握しているかと思っています。具体的には、教室運営に関連した人々の協力を得て、教室設立に至る経緯、活動の概要・蓄積、地域特性を踏まえた問題解決の過程。この過程の中に、いろいろな醍醐味、あるいは分析の視点が本当に必要なところが宝の山のように転がっているかと思いますが、そこを見させていただいて、日本語指導や生活支援に対する考え方などについても実際にうかがってみて、現場を見せていただいて、感想を含めて対話をするということを重視しています。その教室で掲げている理念や目標、その場合に、日本語の位置づけとか、教室支援の位置づけなどがとても大切なので、それをどう考えているか。あるいは、そこに



野山 広

いらっしゃる日本語が第一言語ではない、母語ではない外国から来た方を、どのようにリソースとして活用しているのか。あるいは、専門家の方々とどういう連携を取っているのかということも含めた、関係機関、団体、個人との連携・協働の在り方。そういうことから見えてくる特徴を顕在化していこうと考えています。それらを分析し、その後で、可能であれば、住んでいらっしゃる住民全体の意識改革につながるようなプログラム作りというのは、いったいどういうモデルがあって類型ができてゆくのか、などを考えていきたい。

例えば市販の本でいうと、最近出た本ですが、丸山敬介さんが書いた『日本語プログラム運営の手引き』があります。もうひとつは、国際交流基金が最近シリーズで出している『日本語教師の役割／コースデザイン』。実は我々のやっているプログラム作りというのは、こういう本の内容を包み込むような、まちづくりにつながる包括的な意味のプログラム作りを目指しています。つまり、いわゆる教室の運営だけを考えているのではなく、もっと大きな、ダイナミックな動きの中で、学習者のことをどう考えるかということも含めた上でのプログラムです。

ですから、今日の能代の日本語教室の話、あるいはそれにかかわっている人々の話、町全体の話、主宰者、学習者の話、ボランティア、あるいは支援者としてかかわってきた人の話というのは全部つながりがあって、町全体の動き、ダイナミズムをぜひ聞いていただいて、少しでも実感していただいた上で、後半に持っていければ、と考えています。

ここで登壇者、および今日の関係者をご紹介させていただきます。今日最初にお話をさせていただく「のしろ日本語学習会」(資料 p. 104～107 参照) 代表の北川裕子さんです。その学習会の学習者としての経験を話していただく中国から来られた池田岩(いけだ・いえん)さん、日本名理恵さんです。それをボランティアとして支えてきた藤

田美佳さんです。それから、実際を見ていらっしゃって、この教室にも足を運んでくださっている方2人を、コメンテーターとして呼びました。東京学芸大学の高木光太郎先生、それから東京女子大学の石井恵理子先生です。

それでは、北川さんよろしく願います。

北川裕子 私は少し中国語を話すものですから、中国残留帰国家族に日本語を教えたのが最初でした。18年前のことです。そのときに、1年間日本語を支援したのですが、それで見えてきたことがありました。多くの人たちが中国の人たちを差別していること。その人たちが非常に生きづらいと思っていること。でも、彼らがちゃんと自立して、人の手助けを借りなくても生きていけるようになりたいと本当は思っていること……そんなことを私は感じました。

それと同時に、日本語さえ分かればその人たちはちゃんと自分のことができる人たちだということが分かってから、彼らに対して何ができるだろうかと考え、最終的にたどり着いたのが、日本語支援だと思いました。それが私が初めて日本語教室をつくらうと思った理由です。正直言いまして、最初は全部持ち出しでした。お分かりのように能代市の場合、朝5時に出なければ東京に昼には着きません。そのくらい田舎ですので、地域の中での外国人の人というとはほとんどアジア系の方で、目が青い金髪の方はほとんどいません。その中で、こういう人たちを地域の人たちがどういうふうにとらえているかというのを、私は嫌というほど味わいました。でも、私が日本語教室をつくったときに考えたことは、教室で日本語を教えて、日本語ができる人たちにするというだけではなく、地域の住民としてキチンと受け入れられて、なおかつ自分で発信できる人間にしたい、それが私の一番思ったことでした。

◆「教えること+α」の要素

実は、非常に長い間かかわってきて、この教室をつくった最初のときと、18年たった今とはちょっと違っています。なぜかという、教室の中で日本語を指導しながら、彼らがキチンと自立して、地域の中に必要な人材として育つようになってきているからです。最初は日本語支援だけでいいと思いましたが、今は違います。教室の中の人たちが確実に自分の地域の中で必要となり、なおかつ行政側にとっても、この人たちがいてくれることが地域でいいと思われるようになってきています。これは明言できます。例えば中国の人であれば、後から中国からお嫁さんとして来た人を助け、引っ張っていける人材になってきています。それで教室のやり方、方向が決して間違っていなかったと今は思っていますが、同時

に、行政側からは、そういう人たちが育つことによって、お金を出してもいい教室だと認めてもらえるようになってきました。最初は本当に全然もらえませんでした。これは私がやったからというのではなくて、生徒たちやボランティアの人たちが、「日本語を教える、プラス一人の人間」として、どの人もかかわってくれたというのが一番の成果だと私は思っています。



北川裕子

日本語教室を立ち上げて5～6年ぐらいして、配偶者の大半は赤ちゃんを産みます。私の教室の場合は、明日生まれそうになるまで教室に通いますので、「大丈夫？」と言うのですが、生まれた子がみんな、私が行くと「キャッキョ」と笑う。たぶん、おなかに入っているときから私の声を聞いているのだな、とあるお母さんが言っていました。そういう子どもたちが生まれてきて、割と子ども同士のコミュニケーションが取れるようになってきているということも、私の想定の中にはなかったことですがひとつのメリットでした。

学習者の大半は地方の農家のお嫁さんなので、方言の問題、それから地域の中で、あそこはどこそこのお嫁さんをもらったんだよ、というような噂の問題、そういうものをどうやってクリアさせるかということが、私たちの地域の教室の一番の役割です。それは単に、日本語ができて上手だというだけでは成り立ちません。地域の中に溶け込まなければ発信はできません。日本語ができなくて、中国が、韓国がと言っても誰も聞いてくれません。日本語が話せるようになって、キチンと受け入れられて初めて自分の国のことを語れるのです。地方ならではの事です。そのために、そういう人材を育てるようにしてきましたが、後ほど池田さんもお話ししてくださいますが、こういう人たちが地域の中にたくさんいることが、後から来る外国人にとっても非常にいいことだろうと思っています。ただ子どもの問題に関しては、後にお話ししますが、新たな課題だと思うことがあります。

◆ 行事の中から学ぶ

教室は非常にたくさんの方の行事を行います。行事がたくさんあるのは何のためかとよく聞かれます。じゃあこの行事を何のために行うと思いますか、と逆に聞きます。交流のため、国際交流のため、みんなと仲良くするためとみんなおっしゃいました。でも私は、いいえ違いますと。花見、忘年会、盆踊り、バス旅行、お

茶会、日本料理、生け花、習字と行います。バス旅行は、交流の目的もありますが、何時までここに来ないとバスが発発するという事を通じて、時間を守ることを学ぶ。バス旅行は楽しみと同時に、時間を守る人に育てる。状況にもよりますが、時間に間に合わないと、よく置き去りにします。だってあなたは時間に来なかったと言って。泣かれます。でも、これは教室だから許されることであって、会社とかさまざまなところに行ったら許されないことなのだとこのことを肌で感じさせるためなのです。だいたい90人ぐらい来ます。そのバスには、生徒もいますが、生徒の夫がいたり、おばあちゃんがいたりします。ですから、そういうバス旅行の場で家族の交流もできるし、逆におばあちゃんから相談を受けたりします。「実はうちの嫁さんが……」という相談を受ける場として非常にいいのです。

教室の一番の目標は書くこと。普通は聞いて、話すことから始めますが、うちは読んで書くのが先です。それから聞いて話します。逆に、聞いて話せるけど、字がひとつも書けないという人が教室に来ます。来日して十何年という人がいます。ペラペラと方言でしゃべりますが、字は、書けない。ひらがなも読めない。ですから、うちは最初からまず書くことを先にします。教室では、大人も子どもも、国も違う人たちが一緒に座ります。欧米系とアジア系とかには分けません。非常にメリットがありました。なぜかというと、黒板に書くときに面白いのは、違う国で、母語が違うはずなのに、それ違うよと日本語で、こうだよとか、それでいいんじゃないのと、中国の人と韓国の人とが日本語で一生懸命になって黒板に書きながらお互いに教えたりしています。あれはすごくいいなと思います。教室の中にいることによって、国際交流が全員でできます。

花見もします。花見のメリットは、楽しいから、日本の文化を知るからということもありますが、一番のメリットは何だと思えますか。ゴミです。花見を通じて「違う、それは燃えないゴミ。こっちの袋」「それは燃えるゴミ」というふうには、私たちが一緒にゴミの分別収集方法を伝えます。それから、日本人が花見で散らかしたのには、困ったわね、で終わりますが、外国人、特にアジアの人たちが入った花見の後にゴミが散らかっていると、だから外国人には貸せないのよ、二度とこういうところでやらせられないわと、酷なことをよく言われるので、私はこういう花見の後とか盆踊りの後というのは、掃除だけは徹底させます。来たときよりもきれいにします。地域の町の人たちと遊びに行ったときに、うちの教室の人たちは率先してゴミを拾うそうです。これは私たちも一緒に遊びながら、やらなければいけないマナー。ある意味では、日本人よりずっとうちの教室の人の

マナーがいいと思っています。

習字もします。習字も何のためですか、文化紹介、いいえそれだけではありません。祝儀袋などは、日本の最たる習慣ですので、これを今のうちから書き方を練習する。名前の練習をする、筆の持ち運びを練習するというのは、これは生徒たちから出た希望でした。



忘年会には、子どもたちがいっぱい来ます。教室に来ているのは大人ですが、ここはいつ来てもいいということで、大人だけは会費 3,000 円ですが、子どもは無料です。会場の場所となるお店には、刺し身は食べられない人たちですからとキッチンと事前に説明して、安くあげてもらおうとか、そういう交渉は私どもがしています。来年も頑張りましょうというので、忘年会でハッピーニューイヤーも一緒にやります。

盆踊りに関しては、どちらかというとお年寄り、全然外国人を見たことも接触したこともない人は、アジアの人を怖いと思っている。ある程度の高齢の方は、中国とか韓国を差別的に思っている人たちがいますが、その人たちと交流する場がないか考えました。日本語教室だと絶対に来ません。盆踊りだったら、比較的高齢の人が参加しますし、一緒に踊るだけです。その後いろいろなことが見えてきました。例えばスーパーなどで会うと、「あら、あなた何しているの」と、高齢者が声をかけてくれるのです。田舎の場合は、昼に町にいるのは全部お年寄りです。ですから、お年寄りにいかにこの人たちを理解してもらうかが、すごく必要なことです。盆踊りを通じて、その方たちが声をかけてくれるようになった。分からないと、何々、どれどれとお節介おばさんたちがたくさんいてくれます。この間も、盆踊りで一緒に踊った人に助けてもらった話を生徒が報告してくれました。

盆踊りでは浴衣も大事です。私どもの教室では、全員浴衣を借りて着ています。これを借りるときも、なるべくいろいろなところに公募をして、こういう教室で盆踊りをしますから浴衣を貸してもらえませんかでしょうか。浴衣を着て踊るということを通じて、着物という日本の文化を身近に感じられると同時に、歩き方も学べます。お茶会も開いていますが、着物を着たときの歩き方が非常に分かる

ということもあって、お茶会の後に盆踊りを意図的に設定しています。

日本料理の教室も開きます。これはご主人方からの希望でした。うちの嫁さん、炒めてばかり、野菜は全部炒めものなので、胃が悪くなりそうで、先生何とかしてもらえないだろうかと言われて、始まったのです。やはり教えてくださっている方も、調理師のキッチンとした資格を持っている方です。私でも教えることはできますが、そうではない形を取りたかった。最初にやったのは、米のとぎ方と、だしの取り方。一番喜んだのは、うちの若いボランティアでした。初めてやったという人も多く、私たち自身が日本人でありながら本当に知らないことってたくさんあるなということの発見でもありました。

◆ 変わってきた行政の対応

こうした多くの行事をしながら教室を運営していくうちに、行政側が変わってきました。教室を、日本語だけじゃなくて、人が人として生きていくすべを教える場所なんですね、と言ってくくださった人がいました。そうなんです、だからなくなつては困るんですよと逆にこっちから言いました。ですから行政側から、今はほとんどをバックアップしてもらっています。部屋も優先的に取ってもらえますし、バスも出してもらえます。そして、私は行政に、教室をつくって10年間、必ず月1回日誌を出してきました。毎週火曜日と木曜日に教室を開きますが、その内容を書いて、その下に「所感」の欄を作りました。もう1人の先生には、今月はこういうことがあって、こういうことをやって、こういう成果があったと勉強のことを書いてもらい、私は国際理解という部分で書きます。例えば、今回こういう子どもの問題があって、学校と協議した。校長先生とお話をしてこういう結果になった。だから、もっとこれから町の中が国際化のことを分からなければいけないのではないだろうか、逆に行政側に読んでもらうには、格好のものなのです。たった2人か3人しか読まないかもしれませんが、ずっと書き続けています。

その結果、行政側から、ここ4～5年前から、異文化理解講座というものに、教室から講師として出してもらえないか、と言ってくるようになりました。私の方から、じゃあ中国の人がいます、韓国の人がいますとか、マレーシア、インドネシアとかみんな出して、一緒にディスカッションをしましょうと、応じています。これは、ある意味では日本語が分からなくて非常にみじめな気持ちだった人たちが、自分の国のことをキッチンと発信できる場ができるというメリットも分かりました。

それから、07年に初めて能代市から消防訓練に、「のしろ日本語学習会」から出してくれないかという依頼がきました。これはずっと前から私は言い続けてきたことでした。それで教室から6人出しました。大型店で火事起きたという設定でしたが、私もすぐ見えたことがありました。英語や中国語で話しても、実際に火事起きたときは聞き取れない。パニックになります。その後、店長さんとお話をして、どうしたらいいだろうかと。やはり書くことでしょうと。放送をしても聞こえない。プラカードみたいなものに、「私についてきてください」「エレベーターに乗らないでください」と英語、中国語、韓国語で書いたものを売りに置いておけば、パッと持って誘導すればいいだろうという案が出ました。ぜひ作りたいので、日本語と中国語と韓国語と英語にしてくれませんかという依頼があった。そういう方向で教室をつくってきたことによって、行政も周りも理解するようになり、やっと思っていた教室になってきたのかなというのが実感です。

◆ 見えてきた課題

課題として、子どもの言葉の問題です。生まれたときから私はかかわって、3歳、4歳まで教室に来た子どもたちが、やがて幼稚園へ入る、小学校へ入る。そうしたら私はもう手をかけられない。お母さんは来ていますが、子どもは来ないです。実は2～3年ぐらい前から4つの小学校の取り出し授業に入っていますが、廊下を歩いている子が、「先生」と声をかけてくる。よく見ると、4歳、5歳までうちの木曜日の教室にいた子なのです。私が教室に入ると、「先生何をしに来ているの」と。「中国の子が来ているでしょう、日本語を教えに来ているの」と。「私も分からないことがあるの」「何が分からない？ 国語と算数と、ひょっとして理科？」「どうして分かるの」「そうだよ、日本語が分からないと分からないでしょう」「いいんだ、分からないもの」「そういうこと言わないでおいでよ」「行ってもいいの」「うん、いいよ」と軽く言いました。そうしたら次の週から来るのです。お母さんが後から追い掛けてきて、「先生、うちの子がね、先生と会ったら勉強しに来てもいいって言うからって言うけど、いいのかと思って私もついてきました」と。「9時になったら迎えに来てちょうだい」とその子の母親に言って、教えてみて分かりました。実は、うちの主人は高校教師なのですが、勉強は夫に任せました。彼が言いました。「この子は勉強が分からないんじゃない、日本語が分からないんだ」と。

学校の先生たちは、ほとんど今、どちらかという、障害児の方に力を入れてしまって、日本語が分からない子どものことを理解していない、その結果、子ど

もたちがとても悲しい目に遭っている。でもたった一度、私を廊下で見ただけで、勉強を教えてくれるかもしれない、この人なら、自分が勉強ができないんじゃないじゃなくて、日本語が分からないということを知ってもらえるんじゃないかというふうに判断していたんだと、私なりに初めて理解したと思ったわけです。

今、学習会に通う子どもが18人います。その子どもたちに、学習のための日本語指導というものをしてゆく教室を改めてひとつ立ち上げてみようと思っています。実際にボランティアの人たちが、子どもたちがこのまま捨てられていくのはだめだね、と言い始めていますので、何とかそれはしていきたいと思っています。これに関しては、地域には大学がありませんので、高校生にお願いしようと思っています。ボランティアとして高校生に教室に入ってもらえるようなことはできないだろうかと、必死で走り回って校長先生とコンタクトを取っています。

◆ 日本語をどう教えているか

最後に、教室内で日本語指導に関してどのようなやり方をしているかというのを、少しだけお話ししたいと思います。一応レベル分けをしています。今、『みんなの日本語』を使っています。最初、私は『新日本語の基礎』でしたが、今は『みんなの日本語』にしています。レベル分けをするのと同時に、運転免許を取るとか、出産をする人には出産に必要な日本語、例えば「苦しい」とか「痛い」とか、こういうときにはこういう方がいいよという、特別に指導しなければいけないもの。それから、6年も7年も日本語教室に来る人もいますので、日本語能力試験1級を取るのを目標にする人には、個別に勉強をさせるという形を取ります。『みんなの日本語』や『新日本語の基礎』の場合、助詞があまりにも入り過ぎてすぐに理解するのが難しいので、助詞を抜く問題を自分でよく作ります。こういう教材があると本当はありがたいのですが、要は全部助詞を抜いて、最後にこれをどうするかとか、これは私なりの発見でしたので、今ちょっと別な形でやらせていただいています。

教室へは、いつでも入会できます。入るときにレベル分けをして、あなたならここへ入れるという形を取ります。必ずやるのが、家族と一緒にの面談。ご主人か家族の方に一緒に来てもらい、その人たちに奥さんは勉強をしたいと思っている、でも、家族の協力がなければできない、なぜなら、運転免許もない、夜出てくるというのは、我々日本人でもそうですが、家族の理解がなければ出て来れない、と言う。それからもうひとつ、休むときには必ず連絡をすることをお願いします。こちらはボランティアですので、休むかどうか何も分からない状態で、待たせる



のは失礼ですと。そして最初に教えるのは、休むときの電話のかけ方です。本人がかけられるようになったら、それは家族でなくても構わない。でも最初のうちは必ずかけてくださいと。おじいちゃん、おばあちゃんも含めて家族に必ず念押しし、理解してもらいます。

日本語能力試験をなぜ受けさせるのかとよく聞かれます。地

域の中で、単なる日本語の上手な外国人と、試験に通った外国人とは受け入れ方が全然違います。試験を受けた場合は、全部私は新聞社に知らせて、小さくてもいいですから、載せてもらいます。そうすると、地域の中で、この人は頑張っている人だというふうに伝わってきます。もっとメリットがあったのが、ハローワークでした。職安では「あなたは日本語をどこかで勉強していますか」と聞くそうです。していない人は、「なかなか仕事がないですよ」と言われる。でも私たちの教室の生徒だと言うと、「ああ、あそこに行っているの」と。そうすると逆に、「うちで採用するから、もうちょっと勉強してもう1回受けに来なさい」と言われたとか。職安の方でもまた逆に、うちの教室のことを知っていますから、あそこで勉強している人たちなら、ちゃんと時間を守る、休むときは連絡をするなど、本来、外国人を雇用する際に一番問題になるところが、全部クリアできる。教室に来ている人たちは仕事が結構あります。ですから、日本語を学ぶことは、本当に必要なことだなというのが、私の考えです。

■学ぶ側の立場と考え

野山 どうもありがとうございました。北川さんがお話ししてくださった日本語教室でずっと学んでこられて、子育ても10年近くやってこられた、池田理恵さんから話をさせていただきます。池田さんの話が終わった後、私から池田さんに会話形式のインタビューをさせていただいて、感想などを引き出したいと思っています。